

## 木崎さと子の文学

## —富山・宗教・生命の探求

水野 真理子

## 一、はじめに

木崎さと子（本名 原田正子）（一九三九—）は、富山の代表的な女性作家である。彼女は一九八〇年発表のデビュー作「裸足」で第五一回『文学界』新人賞を受賞、その四年後「青桐」で芥川賞を、さらに一九八八（昭和六三）年『沈める寺』で芸術選奨新人賞を受賞し、着実に作家としての地位を築いていった。彼女は硬派な文体と写実的な筆致で作品を書き、その小説の多くでは、生と死、信仰など、人間の原点に立ち返るような深い哲学的な問題を扱っている。このように、木崎は十分な実力を備えた作家であるにも関わらず、彼女について取り上げた研究論文は、筆者の知る限りおおよそ五点であり、いくつかの先行研究も「青桐」論に集中している。富山の

文学研究を進めていくためにも、また女性作家の研究を進展させるという意味でも、木崎の作品について、さらなる調査、研究が必要であろう。

木崎の幅広い創作活動のすべてを、まだ詳細に理解し切れてはいないが、特に一九八〇年代の初期の作品群を概観すると、次の二つのテーマが浮かび上がる。それは、富山、宗教、生命である。デビュー作の「裸足」では、ある女性が数年間のフランス生活を終えて東京に戻ってくる。彼女はフランス人の夫を愛していたと同時に、アルコール中毒が原因で崩壊していく夫を、自殺へと促した過去を持っていた。「白い原」〔『文学界』昭和五七年一月号〕では、四〇代の女性が、かつて家庭教師をしていた教え子の母親から、娘が新興宗教にのめり込み、信者の男性との結婚を考えているため、彼女を説得してほしいと頼まれ、その教え子と再会する。主人公の女性には中絶経験があり、芽生えた命を自ら消した罪をひきずっていた。そして「青桐」では、主要舞台を富山県高岡市に据え、乳癌を患いながらも、病院での治療を拒否し、病と死を受け入れようとする叔母を、顔に火傷跡があることで人との交流を避け、引きこもるように暮らしてき

た独身女性が、遠巻きに叔母を見守りながら看病する。女性はその過程で、人はどのように死を迎えるべきなのかという問題を目の当たりにしていく。さらに『沈める寺』においては、富山県の氷見市をモデルとしていると考えられる街、氷江の由緒ある寺を舞台に、そこで坊守（住職の妻）を務める中年女性の祐子が、寺の後継を拒んでいる息子の将来を案じる中で、命、愛、罪、信仰心とは何かを考えていく。これらの作品においては、富山、宗教、生命というテーマが、登場人物たちの丁寧な心情描写、生活の描写とともに、重厚感をもって描かれている。

本稿では、今後のさらなる研究を見据えた第一歩として、まず、木崎がどのような経験を経て作家になったのかをまとめ、そして彼女の文学の中核を成していると考えられる三つのテーマ、富山、宗教、生命に焦点を当てながら、それらの問題について、彼女がどのように作品に描いたのかについて考察してみたい。

## 二、木崎さと子の経歴―作家になるまで二

### 二―一、異文化体験と生活感

木崎は、一九三九（昭和一四）年一月六日、旧満州国新京（現・長春）に生まれた。父横山辰雄は応用科学を専攻する研究者で、新京工業大学の教授や満州帝国立の大陸科学院に研究員として勤務していた。母は、木崎が四歳の時、満州で病死している。母の死後、彼女は継母に育てられた。

終戦後、満州から引き揚げ、静岡県沼津市を経て、父の赴任先の富山大学工学部がある富山県高岡市に、小学五年の時に引っ越す。富山大学工学部が高岡市にあったことから、高岡で少女時代を過ごした。高岡高等学校を卒業後、東京女子大学短期大学部英文科に入学し、一九六〇年、卒業する。その後、繊維会社の帝人に就職した。

一九六二年、二三歳で、植物発生理学者の原田宏と結婚し渡仏する。この結婚が彼女の人生に新たな頁を加えたと言える。夫の転勤のため、その後一四年間、様々な海外生活を経験することとなった。一九六三年、二四

歳の時にはカリフォルニア州パサデナに渡り、そして翌年、フランスに戻る。一九六四年に長女を、一九六七年に次女を出産している。

一九七四（昭和四九）年、三五歳の時、夫が筑波大学に就職したことにより帰国し、東京の南青山に居住した。日本での生活も束の間、一九七六（昭和五一）年には再び渡仏する。一九七九（昭和五四）年に帰国し、この年から創作を本格的に開始した。そして、木崎の作品は、すぐに日本の文壇において注目され始めた。前述したように「裸足」「青桐」「沈める寺」が各賞を受賞し、実力が認められていく。

これらの経歴からわかるように、四〇代で作家デビューを果たした木崎は、どちらかと言えば遅咲きの作家と捉えることができよう。そして、彼女の作品は、結婚後の暮らしや様々な体験から生まれ、生み出された生活に根差した作品であると言える。その暮らしには、アメリカやフランスでの滞在経験が大きく影響しているようで、須波敏子は『青桐』論の中で、「異文化を漂う主婦作家」と称している<sup>三</sup>。須波は木崎を、日本の高度経済成長が波に乗った一九六〇年代以降に続々と出現してくる、

異文化体験を経た女性作家たちと比較して論じている。

例えばそうした作家として、大庭みな子、山本道子、米谷文子、塩野七生を挙げるが、彼女らとは特に異なる特徴として、「戦後の日本が追随した超資本主義大国アメリカ文化の影響ではなく、人間の中の自然と文化の調和を伝統的に重んじるカトリックの農業国、フランスの文化を深く吸収して来た」点を第一に指摘している<sup>四</sup>。そして、旧満州での深刻な戦争体験も、木崎の異文化体験として重要だと言及している。須波が述べるように、木崎の文学の発展において、満州とフランスは重要な要素となっているだろう。満州は木崎の出発点であり、そしてフランスの文化と文学が、その満州での幼児期の、特に宗教的体験を肉づける形となったと考えられる。

## 二二、文学的背景

次に木崎が作家を目指すに至る、文学的な背景を探ってみよう。彼女は幼い頃から「おはなし」を創るのが好きな少女であった。そのことについて、次のように回想している。

こどもの頃、人が考えごとをするとは「おはなし」を創ることだ、と信じ込んでいた。小さな頭が、自分で考え出した「おはなし」の切れ端で一杯で、いつもそれをいじり廻していたので、誰でもがそうしている訳ではないと知った時には、本当にびっくりしたものだ。「おはなし」以外に一体何を考えるのか、と心底ふしぎだった<sup>五</sup>。

さらに、一〇代の時、神の存在の有無など形而上的な問題も考えごとの種になるのだと知り、二〇代に入る頃に、この二つの考えごとや妄想が、小説というかたちのなかで、一つに溶けるのだと気づいたとも述べている<sup>六</sup>。このように、彼女は物語を創ること、考えることを幼少期から常に行ってきた。そこには母が病床につき、一人遊びばかりしていたという家庭環境も影響しているようだ。

木崎の読書体験についてはどうだろうか。彼女は王道的な読書体験を経て成長している。本を乱読して育ったが、そこにはかなり父の影響があったようだ。父は木崎

が本を読んでいると必ず部屋に入ってきて、何を讀んでいるか聞いたという。父は文学好きで俳句も作ったため、俳句の味わい方などを父から教わった。また夏目漱石や森鷗外の作品しか読ませてもらえなかったといい、小学校上級で漱石の作品を読み始め、中学三年で『こころ』を讀んで、感激したという。漱石から文学についての本質的な影響を受けたと木崎は回想している。また源氏物語も好み、授業で必死に讀んだり、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』を夢中で讀んだ。その他、ドストエフスキ、サキ、ジュリアン・グリーン、エミリー・ブロンテ、樋口一葉も彼女の好きな書物であった。ブロンテと一葉を特に愛讀したようである。また、二度目にフランスへ行った時には、三島由紀夫の全集も持参していった。加えて父から薦められた本には、寺田寅彦の随筆や中谷宇吉郎の書物などもあり、科学的な方面に関しても関心があった<sup>七</sup>。

彼女はまた文学作品だけでなく、絵画などの芸術作品からも影響を受けているようだ。例えば、アール・ヌーボー、ギユスターヴ・モロー、フランスの世紀末的工芸

品に関心を持っていたという。その意味で三島由紀夫の作品も好んだ。加えて、絵画への興味は小説内の描写や文章に影響を与えていると自分でも感じ、「まず目で見るように描きたい」と言い、カメラマンにも憧れていたと述べている<sup>八</sup>。こうした体験が、彼女の作品のリアリズム的な描写につながっていると考えられる。さらにはフランスに滞在し、フランスの文学や文化に接したことも、彼女の作品世界を作り上げることに貢献したと思われる。彼女は、日本の近代文学、俳句、フランス文化、文学、絵画などから幅広い影響を得て、作品を生み出していたのだ。

### 二一三、生と死に対峙して

木崎は自らの幼年期を振り返った時に、母の死と満州帝国の崩壊という一大事件が、自身の死生観に大きな影響を与えたと述べている。満州に生まれて満州に育ったことが、木崎自身の人生のあり方や道を決定づけたと認識しており、「ほとんどそこにあるんじゃないかしら。すべてのスタート点も、終着点も。」<sup>九</sup>と述べている。満州

帝国が虚構の存在だったこと、母が亡くなったことにより、自分が属していたものすべてが崩れ去ったという体験が、木崎の人生のスタート地点にあった<sup>一〇</sup>。満州国崩壊により、すべてはいつか滅び去るものだと実感し、そして母との別れから、初めに死が存在しているという感覚を得、小さい時から死を考えない日はなかったという。スタートのところは虚無や闇があり、「そこにポツと、たまたま生命ある状態で浮いているというような感じがずっとあったんです。」<sup>一一</sup>と木崎は述べているが、この言葉が彼女の死についての経験の重大さを物語っている。

### 二一四、宗教との出会い

そうした死と生命の問題が、「向こうから照らされる」という感覚を、同じく幼児期に得たと木崎は説明している。それは無限というものからの「まなざし」を感じる経験で、人格化されたものとの出会いだったという<sup>一二</sup>。その人格化されたものとは、イエス・キリストであった。幼少期の体験を木崎は次のように振り返っている。二歳か三歳頃のことであった。四歳半上の姉は、小学校に通

つていたため、自宅で孤独に時間を過ごしていた彼女は、日がな一日、窓から外を眺め、一人遊びをし、地平線や空を見上げていた。また、庭の樹木、ひまわり、森を見て、さらには、野原をさまよう黒い野良豚をのろまな自分と重ね合わせていた。そのような毎日の中で、父が姉と自分に童話を読み聞かせてくれたが、まだ幼いために「かちかち山」ですら、よく理解できなかったという。しかし、ある本を父が読んでくれた時、父の声が彼女の心に流れ込んできた。「あのひとは、茨の冠を被せられて、血の汗を流しながら、じっと優しい眼で、私をみつめました」<sup>一三</sup>と父は言った。この一節から、木崎は幼いながら、啓示的な体験をしたのだった。

この文章は、白い鳩の目線から語られている。たいそうな苦痛に耐えて歩くその人に追隨して、白い鳩が飛んできて、その鳩をその人は茨の冠の下から血の汗を流しながら、「じっと優しい眼で」見つめたという情景が、幼い木崎の脳裏に浮かんだ。その人は自分を見ていた。その私を見つめる優しい眼を、ありありと見たという。こうした体験を木崎は得ている。さらに、この記憶を約四〇年後、キリスト教の洗礼を受けた時に思い出した。そ

の時、記憶の底からキリストの眼が蘇ってきたという<sup>一四</sup>。このように、キリスト教との出会いを幼少期に経験した木崎は、帰国後もキリスト教と関連するものに浸って育った。東京の小学校に通っていた頃には、姉が東洋英和女学院に通っており、聖書の言葉を書いたカードなどを持って帰ってきた。また、富山時代においては、バプティスト派のカナダ人宣教師が高岡に居住しており、彼女は少女時代、その宅へずっと出入りしていたという<sup>一五</sup>。そして、フランスに滞在している間に、キリスト教の中でも、特にカトリックへの信仰がより確実なものになったようだ。生物的には生きているが、常に死がずっと存在したという感覚を持っており、それを転換していたのだという感じがあったという。カトリックでは向こうから与えられる、自分の力ではなく一方的に与えられるという感覚があり、それを「秘蹟」だと木崎は言い、これがプロテスタントとの違いだと説明する。カトリックは「上から一方的に与えられるもので、人間は本当にただただ受けるだけ」とし、プロテスタントは「人間の側の考え方によるところが強い」とその差異を説明している<sup>一六</sup>。

こうしたカトリックとの接点が、文学的な影響へとつながった作品が、デビュー作の「裸足」であった。主人公の女性せい子は、伯父の長男でいとこの邦明に、都合の良い女としての性的に利用されていた。そうした関係も、邦明の結婚時に手切れ金を渡されて終焉する。娼婦のような惨めさを味わった彼女は、その金銭を準備金として、邦明の友人から紹介された丸一商事のパリ事務所の事務職員となる。そのパリで一人のフランス人男性アンリと出会うのである。内縁の夫となったアンリは、先天性白皮症を患っており、癩癩持ちで、アルコール中毒、顔全体が真っ赤で、白い口髭をたくわえている。無口だが、柔らかな心を持ち、企みなどない人間である。死を予感させるような人物で、死ぬ人では表せないようなやさしさを持っていた。

アンリの「みじめな、透明なやさしさ」でせい子は癒されていく。しかし、アルコール中毒が原因で、アンリは次第に死人のようになっていく。「死になさい。ママンのために、ジャクリーヌのために、わたしのために、死になさい」セとせい子はアンリにささやきかける。壊れているから善良な人間だったアンリだったが、壊れ過ぎ

て怪物のようになってしまった。やさしく綺麗に輝く彼の生が台無しにならないようにと、せい子は彼に自死を促したのである。そしてアンリは線路に飛び込み、電車に轢かれて亡くなる。

この短編のせい子とアンリは、イエスとマグダラのマリアを想像させる<sup>一八</sup>。マグダラのマリアとは、新約聖書中の人物で聖女と言われる人である。イエスに七つの悪霊を追い出してもらい、イエスの十字架上の死を見届け、最初にイエスの復活の証人となって使徒たちへの報告の役目を与えられた人物である<sup>一九</sup>。木崎自身、キリスト教を意識してこの作品を書いており、また同時に、作家フランソワ・モーリアックの影響も受けていることに言及している<sup>二〇</sup>。しかし、日本では、この作品に対して、キリスト教が基盤となっているという批評は出なかった。

そのため、彼女は日本とフランスの文化的、文学的背景の違いを認識し、その後作風の改変をしていくことを考えたという。例えばスパゲッティを茹でて失敗したという生活描写や現実描写に力を入れるほうが良いと気づいたとも述べている<sup>二一</sup>。こうして「裸足」以降の作品で、作風の模索をしながら、彼女は生死や宗教的問題を描い

ていくことになる。

### 三、「裸足」以降の作品に登場する富山

「裸足」以降、木崎は富山を舞台とした作品や、富山性をかなり明確に反映させた作品を発表していく。それらの作品について紹介しておこう。

まず「離郷」(『文學界』一九八一年七月号)であるが、ここでは、富山の黒部と考えられる田舎出身の仲江が、富山の本家を二十年前に家出した、父のいとこ春美の東京の住まいを訪ねる。仲江は夫の浮気が原因で、息子の道男を実家の母に預けて、衝動的に家を出てきた。春美は牡丹王と呼ばれた日系アメリカ人の老人の屋敷に同居していた。そこに春美の知人の藍子が訪れる。春美、藍子、老人との数日の付き合いの中で、仲江は生死、結婚、妊娠出産について思いをめぐらす。富山弁が会話に反映され、烏賊の黒づくりや鱒ずしなどの富山の土産品、また富山はかつて結核での死者が多かったなどの富山に関する話題が挿入されている。そして、富山という故郷は、地に根を張ることができる場所として描かれている。

「夏草」(『文學界』一九八一年十二月号)においては、ある夏の頃、四〇代の三江が三〇歳を過ぎた同僚の逸子と北陸の鷹見市に帰る。この鷹見市は作品内の記述から、高岡市をモデルにしていると考えられる。三江は高校生までそこに住んでおり、逸子は実家が鷹見市にある。逸子の家に招かれ、お盆で帰省し集まった、逸子の兄弟姉妹ら親戚たちと夕飯をとにもする。鷹見市の商店街の様子、仏教、金屋町の情景が詳しく描写されている。また逸子の長姉の夫による戦争体験の話や、妻子ある男性との恋愛という三江の過去、彼女の高校生時代が回想され、また家族たちが集まる田舎の盆の風景が、臨場感をもって描かれる。

「楼門」(『海燕』一九八三年八月号)では、四〇歳の真子と四二歳の悟が富山の瑞龍寺で、二〇年ぶりに再会する場面から始まる。真子の父は文部省の事務官、悟の父は教官で、高岡の新制大学の工学部に勤務していた。二人はともに職員宿舎で育った幼馴染であった。互いを恋愛対象として意識してもいたが、悟の足に障害があったため、真子は恋愛に発展することを避け、結果的に悟を傷つけた過去があった。真子は東京の短大を卒業しす



ぐに結婚したが、離婚してしまう。そして帰郷した折に、悟に謝りたい気持ちで彼に連絡し、再会した。城址公園、前田利長など高岡の土地についての描写が作品を彩っている。真子が子供時代を懐かしみ、罪を償いたい思いで帰郷する場所として高岡が描かれている。

これらの作品には、特に富山の風物、土地柄、名所などが挿入され、そして、木崎の少女時代の境遇、家庭環境や経験が織り交ぜられている。また「旅の人」と地元住民との相違や、浄土真宗への篤い信仰心が描かれる。加えて重要なのは、富山という場所が、帰郷する場所として設定され、そこに生と死の問題を絡める形で物語が展開されていることである。

#### 四、『青桐』にみる富山・宗教・生命

##### 四―一、あらすじ<sup>三三</sup>

それでは次に、芥川賞を受賞した「青桐」を取り上げ、そこに表れる富山、宗教、生命の問題について詳しく見てみよう。まず話の筋は以下である。時代設定はおそら

く一九八〇年代で、舞台は北陸のT市と記載されているが、富山県の高岡市をモデルとしている。兄夫婦のもとで家事手伝いをしてひっそり生活する三四歳の充江。

そのような暗澹とした毎日を送る彼女の生活に変化が訪れる。乳癌に蝕まれ死期が近いと自覚した叔母が、かつて居住していた高岡の家に東京から戻り、自宅療養することになった。叔母は、結核により両親を亡くした充江と彼女の兄を、母親代わりとして育ててくれた人である。叔母は病院にも行かずあらゆる治療を拒否している。叔母の家のすぐそばに住んでいる充江は、叔母の息子である従兄の史郎から、治療を拒否する叔母の意思を尊重し、そつと見守りつつ、主に食事などの世話だけをしてくれないかと依頼された。史郎に対して淡い恋心を抱いていた充江は、胸の高鳴りを押さえつつ、史郎の依頼を受諾し、叔母を見守っていく。そうした生活の中で、死について、そして自分の過去と現在について見つめていく。

この作品において、生と死、信仰の問題を考える場として、木崎は富山という場所を選んでいる。そしてこの物語は、彼女の中学一年生からの親友の話に着想を得ているという。その親友は、高岡郊外の地主の娘であり、

母一人子一人で育った。音楽の先生だった彼女の母は、「青桐」で描いたような亡くなり方をしたという<sup>二三</sup>。

#### 四―二、『青桐』に描かれる富山の形

続いて作品に描かれる富山性を見てみよう。叔母の家「曾木」は戦前、大地主として栄えた家柄であった。叔母自身は金沢出身で、嫁いだ夫（充江の叔父）の妹が充江の母である。この「曾木」という本家の衰退が、物語の根底にある。そして拡大家族という方から核家族へと向かっていく社会変化や、一九六〇年代の高度経済成長期における、富山の田舎から東京をはじめとする都会へと人々が移動していく社会情勢が映し出されている。実際、この「青桐」が発表された時、この作品については、例えば作家の安岡章太郎は「単なる癌小説ではなく地主階級の没落を描いた小説」<sup>二四</sup>だと評し、また富山出身の文学者佐伯彰一は「手がたいリアリズム、家族小説の形、都会対田舎という副テーマがある」<sup>二五</sup>と論じている。

大地主であった「曾木」の家屋敷の様子も、富山に見

られた、そして現在でもその名残を見せている農家の様子を象徴している。通りに面して屋根をのせた門があり土塀で囲まれている。門のそばの両側に二つの納屋があることから、その門は納屋門と呼ばれている。納屋門をくぐると木の内塀があり、広い庭を縦に仕切っている。三つの土蔵もあった。母屋の玄関は広い式台を備えており、脇に広がる土間、襖を取り払えば大広間になる田の字型に並んだ座敷、黒漆と黄金の仏壇、その背後に壁を隔てて並ぶ小部屋、味噌瓶が据えてある味噌部屋などが備えられていた<sup>二六</sup>。

従兄の史郎の家庭状況には、田舎から都会への人口移動の情勢が映し出されている。史郎は東京の大学へ行き、卒業後は東京で就職し、また妹（充江の従姉）の晴子も東京の大学に進学した。その結果、叔母は意を決して、母屋を解体することにし、母屋の一部は寺に移築して離れの小さな住居だけを残した。この小説の時代設定は一九八〇年代と推測されるが、そうすると史郎が大学を卒業した二二歳頃とは、およそ一九六〇年代頃と想定され、まさに高度経済成長期で若者たちが田舎から都会へと流出していった時期と重なっている。一方、充江よりおよ

そ五歳上の兄浩平は、地元の農業高校を卒業して農協に勤め、結婚を機に充江とともに独立し、曾木の家の近所に住居を構えた。兄は地元に残った若者として描かれている。

娘の晴子が上京した後一〇年ほど、おおよそ一九七〇年代初め頃まで、叔母は離れで一人暮らしをしていた。その住居は母屋の解体時に改築されたものである。部屋が三つあり、長い渡り廊下の先に茶室と水屋を改造した台所、そして風呂場がある。三つの部屋のうち、南に縁側がついた十畳と八畳の座敷は「新部屋」と呼ばれ、北から西に濡れ縁が廻っている六畳は「化粧部屋」と呼ばれてきた。その後叔母は、東京に住む史郎の家と娘晴子の家を行き来して暮らし、富山の家には年に一、二度しか帰らなくなっていた<sup>二七</sup>。濡れ縁のすぐ先に梧桐の木が、叔母の帰りを待つように若葉を広げている。

こうした曾木の本家に対する村人の態度も、戦後の地主の衰退という社会変化を表現している。例えば、小作人であった源爺は、田畑を切り売りして金銭を得ていき、金銭崇拜を持った人物として描かれている。冠婚葬祭の折には本家からの寸志があてにされ、叔母はその度ごと

に、気前よく金銭を差し出してきた。しかし、村人はその一方で、先祖伝来の道具、庭石、はてには家屋敷まで売った本家の女主人（叔母）を批判している<sup>二八</sup>。

また小説内には、都会と田舎の対比が描かれ、都会に対しては否定的な見方がなされている。従兄の史郎は、村人からは本家の長男という意味の「御兄さん（ごあんさん）」と呼ばれるにすぎず、本家の後継ぎとしての「旦那さん」という名では呼ばれないため、都会に出た彼は村人たちによっては認められていない存在として描かれている。史郎の妻梨香は、神経質な性格で、子供たちに小学校受験をさせ、田舎の富山の人間とは距離のある都会の人間として、象徴的に描かれている。

#### 四―三、主要テーマ―生と死

死を自宅でどのように迎えるのかがこの小説内での重要なテーマではあるが、現代でいうところの在宅医療とは、異なっているよう。在宅医療は、患者が病院での入院、治療ではなく、自宅においての治療を選択し、医師、訪問看護師、また訪問リハビリ、訪問介護の専門家が連携

して医療行為を行っていくものである<sup>二九</sup>。それに対して、「青桐」においては、叔母は一切の医学的治療を拒否し、病をそのまま受け入れ、死への道をゆっくり歩んでいく。叔母が死と向き合う姿を見てみよう。充江は叔母に、医者にかかりたくないというのは本当なのかとためらいながら尋ねる。それに対して叔母は次のように言う。

本当やわ、むろん。周囲の人に気を兼ねさせて、史郎には気の毒なことや、とは思うけれども……。お医者にかからんで、自分で病いをいたわる自由いうものも、ひとにはある、と思わん？（六三）

この言葉に対して充江は、「病いをいたわる、というのが、単に自らを看病するというより、病気を慈しんで受け容れるというように聞えた。」（同上）と感じている。さらに叔母は「……躰ごとのことやもの。まるまる、そのひとの生命いのちのことやもの……」（同上）と答える。それに対して充江は、真実を得たように感じる。

あ、と眼がひらくような思いがあった。今朝方、史

郎から聞いた時には、ひたすら死に向かって進む、悲壮な陶酔感を思い描いて、分る、と胸の内でおぼえた。しかし、叔母は病を含んだ生をも、あるいは死そのものをさえ含んだ「まるまるその人の生命」をそつと愛しんでいるだけなのかも知れない……。〔六三―六四〕

前述したようにこの小説には叔母のモデルとなる人物が存在したようであるが、現実にはかなり稀有だと思われる、こうした叔母の病との向きあい方を描くことで、木崎は何を提示しようとしているのか。この叔母の生き方は、死と一体化し、朽ち果てていく肉体を受け入れるという姿勢であり、そうした選択をする自由も人間にはあるという主張である。

こうした叔母の考えを、充江は半ば理解できるようでいて、すべてを会得できないでいる。一人で病を養うのも、自分一人のための暮らしを人が生きているからではないかと充江は主張するのだが、それに対して叔母は、「……そうやるか。自分ひとりのため、ともよう言いきらん。そやけど、誰のため、いうて……」（六五）と庭の

梧桐の木を見上げ、「きつと、会ったこともない、誰かのため、か知れんわねえ」(同上)と答える。この会ったこともない誰か、というのがいったい誰なのかが、この作品を理解する一つの鍵でもあると考えられる。しかし、誰なのかは直接的には描かれない。

叔母との関わりの中で、死を見つめると同時に、充江は生についても考え始める。彼女の人生によってあぶりだされる生について見てみよう。顔の火傷の跡を隠すため、引きこもり、半ば死んでいるかのような生き方をしてきた充江であった。しかし、叔母の生き方、死の受け入れ方に接して自分の生も見つめ直し、また叔母に自分が必要とされていることで、自分の生をしだいに取り戻していく。

しかし、生を取り戻しつつあった充江の心を、再び元の暗い世界に引き戻すような出来事が起きる。それは彼女の顔の火傷跡に関することであった。火傷の跡は、彼女の中に深く刻まれた心の傷でもあった。整形を勧められても拒否してきた火傷の跡は、彼女のアイデンティティにもなっている。その火傷の原因について、充江は衝撃的な内容を兄から聞かされる。まだ幼かった頃、従姉

の晴子と充江が台所で料理をする叔母にまわりついていた時、叔母が天ぷら鍋をひっくり返してしまった。その時、天ぷら鍋に近い場所にいた充江ではなく、思わず晴子だけを突き飛ばしたという。そのせいで充江は熱い油をかぶり顔に火傷を負った。これは兄の記憶であった。この内容に、充江は当然ながら甚だしい衝撃を受ける。自分に整形手術を勧めてきた叔母は、火傷を負わせたという彼女自身の罪を償うために、そうしてきたのかと充江は思う。叔母の看病をしながら生を取り戻しつつあった充江は、また心を閉ざし悶々と暮らす闇のような日々に戻っていった。三〇。

その後、晴子が海外から駆けつけ、また史郎の妻梨香も富山に来て、叔母の看病に加わる。それから間もなく、叔母は息を引き取った。自身の火傷の原因を作ったのが叔母であったと知った充江は、複雑な思いで魂が抜けてうつろになつていく叔母の死に顔を眺めていた。

葬儀も済んだ後、晴子と梧桐の木を挟んで話す機会があり、充江はずっと心に重くのしかかっていた火傷の原因について、晴子の記憶を思い切つて聞いてみる。すると、天ぷら鍋をひっくり返したのは叔母ではなく、手伝

いに来ていたおたけ婆さんで、叔母は咄嗟に右手でガスの火を止め、左手で晴子を突き飛ばしたというのだ。しかし、天ぷら鍋に近い方にいた充江ではなく、娘の晴子の方をとっさに突き飛ばしたのは事実で、それを叔母は悔いていたと晴子は告げる。

この言葉を聞いた充江は、自分にとっての叔母の存在の意味、彼女の生き方や死の意味を再び考え始めるのである。数日前に見た不可思議な夢が、充江の頭に浮かぶ。その夢は、幼少期の記憶が混在したものであった。梧桐の周りをこども達が手をつなぎ、かごめ、かごめを歌っている。その中に、史郎、晴子、浩平、和美、充江もいた。「後ろの正面だあれ」の言葉とともに子供たちは散らばる。目を隠して梧桐の後ろでしゃがんでいる子は、叔母か充江のようだった。冷えた夕暮れは水底のようで青い樹が硝子のように蒼ざめている。そこに巨大な魚が泳いできて、叔母か充江かどちらか不明な屍体の傍らを過ぎてゆく。充江が、そばに晴子がいると思った瞬間、水底の林のような藻の間を縫って史郎が泳いでくる。その口には光る珠がくわえられていた。その珠を充江は欲しいと思ひ、唇を動かし喘いだところで目が醒めた。この

ような不可思議な夢であった<sup>三</sup>。

充江は夢のなかの光る珠をふと思ひ出す。水底の屍体は、やはり充江自身であり、叔母は、崩れた乳房の奥からとり出した青く光る珠を、充江に遺してくれようとしたのではなかったのか。(二三九)

先の不可思議な夢やこの比喻をどう解釈するのは難しいが、この物語における充江の心の変化と叔母の役割を鑑みると、青く光る珠は、生命を象徴しているように思われる。暗く単調な生活を送っていた充江のもとに史郎が現れ、叔母の世話をする中で、充江は生を取り戻しつつあった。しかし、火傷の跡の原因が心に重くのしかかり、再び死の底であえぎ苦しんでいた。史郎が持っていた光る珠を充江は、手にすることができずもがいていた。そのような充江に、叔母が崩れた乳房からとり出した青く光る珠を遺そうとしたということは、叔母の死が充江に生への再出発を促したという意味として、捉えることができないだろうか。そして最後に充江は、火傷跡を治すための整形を受けてみようと思ひ始める。この心

の変化は、彼女の人生、生への再出発を明らかに示している。

―しゅじゅつ、するがやったら、きつと、会うたこともない、だれかのためか知れん。透きとおつた幼女の声が、充江の耳を搏ち、梧桐の幹をのぼつてから、空に消えた。(一四一)

この一文で物語は静かに終わる。この「会うたこともない、だれか」とはいったい誰のことを指しているのだろうか。ここではやはり、木崎の幼少期の体験を思い起こす必要があるだろう。「死」から出発している充江が、火傷の跡を治すことで「生」を得る。死と隣合わせだった幼少期の木崎が、キリストという存在に出会い、救われたという原体験の反映だとすれば、この誰か、というのはキリストのことを指していると考えられることもできるだろう。そしてこの表題「青桐」が何を意味しているのかも重要な点である。この青桐や梧桐の意味するところについてはまた別稿にゆずりたいが、時々描かれる青桐、梧桐の木は、まずは本家の象徴でもあり、充江の幼い頃

の思い出も表しているという印象がある。また叔母の生き方の象徴にもなっているだろう。

「青桐」は、一九八〇年代頃の富山の元地主、農家の様子、そして都会と田舎の対比や、心に傷を抱えた充江の心理と心の変化を細やかに描いた写実的な作品である一方で、木崎のキリスト教的宗教観や生命観が物語の根底に流れている深い作品である。

##### 五、『沈める寺』―富山と信仰の問題

「青桐」では乳癌という病を経た死への向き合い方、そして充江の人生の再出発が描かれていた。その根底には木崎のキリスト教にもとづく宗教観も感じられる。「青桐」以後、宗教的問題に関して、真正面から取り組んだのは『沈める寺』である。最後にこの作品について言及しておくことで、富山と宗教というテーマをなぜ木崎が選んだのかについて考える手がかりを提示してみたい。

『沈める寺』は、次のようなあらすじである。氷見市をモデルとしている氷江という町に、聖永寺という由緒ある寺がある。その聖永寺の坊手を務める祐子は、一人

息子の晴光の将来や寺の後継に関して心を悩ませていた。というのも、晴光は一年前の春に京都の宗門の大学を卒業し、その後上京したままで氷江にはなかなか帰ってこなかったからである。ところが、晴光は梅雨の頃にふらりと戻ってくる。再び上京するつもりでいることは目に見えていたが、この間に氷江に留まるように晴光を説得しなければいけないと祐子は感じていた。晴光は絵画や音楽に夢中で、一日中絵を描いたり、ギターを奏でたりして毎日を過ごし、寺の後継を拒んでいる様子であった。そのような折、聖永寺の下寺の一つであり、本坊の境内にある寂明寺の次男で中学一年の昭二が、義父と母のもとを離れて東京から戻り、再び実の父とともに生活することになる。昭二の母は、障害を持っていた長男（昭二の兄）を置いて、氷江で漁師をしていた男性と駆け落ちしたのだった。家を出る時に昭二が泣いたからやむなく連れて行ったというような母親であり、昭二に対して深い愛情を示してこなかった。こうした状況下で、住職、妻である祐子、寺に出入りする門徒総代の孫である女子高生朱美、氷江の町でスナックを経営し占い師でもある怪し気な美女の智香尼、そして祐子の小学生時代の同級

生でもあり、晴光の高校の担任でもあった藤木、彼らの関わり合いが繰り広げられていく。その中で、氷江の歴史や自然、浄土真宗や山岳信仰、家族のあり方や母の愛情、また寺の経営や維持、後継者の問題、罪や赦しについてなど、多くのテーマが描かれていく。

これらの中で主要な問題は、やはり信仰に関してだろう。ただ、クリスチャンである木崎が、キリスト教ではなく、浄土真宗を通して宗教心という問題にアプローチしたのはなぜだろうか。その一つの理由は、やはり富山に根強くある浄土真宗への篤い信仰心にあるだろう。親鸞上人が開祖した浄土真宗は、室町時代後期の一四七一年六月、蓮如上人が、加賀・越前国境の吉崎（福井県金ヶ崎）にて布教活動を行ったことから北陸に広まったとされ<sup>三</sup>、富山も福井、石川とともに真宗王国と呼ばれている。したがって、富山を舞台に宗教的問題を描く時には、浄土真宗を描いてみたいと思わせるのは自然なことではある。

明治生まれの富山の女性作家小寺菊子（一八八四—一九五六）も、富山における浄土真宗の問題を、小説の中でたびたび取り上げてきた。小寺は「哀しき祖母」（一九



二二) (のち「他力信心の女」(一九三七—一九三八)と改題して発表)において、悲しい末路を辿る老女を描く。熱心な浄土真宗の信仰者である祖母は、信仰心の薄い夫や長男夫婦から理解を得られないことに不満を抱く毎日を送っていた。それに加えて、さまざまな悲劇が家庭を襲い、夫は死去し、息子は行方知れずとなり、息子の妻と孫たちも家を出る。一家は離散し、祖母が多額の献金をしてきた寺からも見捨てられ、彼女は一人悲しい死を遂げる。そのような悲痛な祖母の姿が作品の中心として描かれている。

また「念佛の家」(一九三四)は、小寺が富山に帰郷した際の自身の経験が語られる自伝風の小説である。父方の本家に久方ぶりに訪れた際に、本家の長男が結核を患っていること、それ以前から家族の何人もが結核で命を落としてきたこと、それにも関わらず、近代的医療による治療を求めるともなく、ひたすら念仏を唱えているだけの諦め主義、頑迷な念仏主義に頼っていることに対して、批判的な思いを小寺は作品内で描いている。木崎と小寺の浄土真宗の扱い方に相違はあるが、富山という舞台においては、浄土真宗をめぐる宗教問題は、重要な

要素の一つとして認識されうるものである。

そうした富山の風土や特性という側面以外に、なぜ木崎が、富山を舞台に、生死、信仰をテーマとする作品群を描いたのか、木崎自身の言葉から探ってみよう。木崎は高岡についての印象を「死を凝視しつつ」や『夢の記憶』において述べている。満州での生活に比して、戦災に遭わなかった高岡は、非常に落ち着いた城下町というものであった。金沢の城下町とは違い、商業、手工業が盛んで実生活を大切にす、地に足がついた生活をする町だという印象があったようだ。真宗王国と言われ、信心が染みつき、どこか家庭にも立派な仏壇がある。その特徴は、自分の有していないものとして快かったとし、日本の中の一番良い部分を高岡で見た気がする」と述べている<sup>三三</sup>。

その一方で、少女時代においては、自身は「旅の人」「異邦人」「梓の外」の人だったと感じていたという。その後、本当の異邦人として長く外国で暮らし、帰国して、高岡との縁が戻った時に、友達がいるというなつかしさや北陸の戦災に遭わなかった街の古さと、自分の日本語表現とが適合し、小説の舞台として得難い場所となった

と述べている三四。

こうした木崎の富山への思いや、彼女の人生を踏まえて見てみると、彼女が富山をどのように位置づけたのかは次のように捉えることができよう。まずは彼女には虚構、そして死としての満州があった。その後、高岡で少女時代を過ごしたことで富山の風土や慣習を肌身を感じる。さらに東京女子大学短期大学部で学び、結婚を期にフランスやアメリカで暮らす過程で、カトリックへの確信も強くなっていった。また、フランスやアメリカで過ごした時間においては、自身を異邦人として捉えていた。そして、再び、少女時代を過ごした富山に戻ってきた時に、生の実感と異邦人ではない自身の居場所を、富山において獲得できたという感覚を得たのである。そうして、回帰しうる場所として、高岡を中心とする富山が位置づけられたのだろう。富山という第二の故郷、富山にある土地に根差す生活、篤い信仰心、これらが木崎のカトリックにもとづく生命観、宗教心と結びついて、創作の意欲を掻き立てていったのではないだろうか。

## 六、おわりに―戦争体験をどう描くか

以上見てきたように、木崎のデビュー当時から、作家として成熟していくまでの経緯を確認し、それらの経緯や彼女の富山に対する見方、彼女の生命観、宗教観が、作品の随所に反映されている点を明らかにした。富山、宗教、生命の探究という主要テーマについての要点はつかむことができたと思うが、彼女の作品はその舞台設定や描写されているモチーフの暗示するものが重層的に作品の中に織り込まれており、より深い作品の読解が今後必要だろう。それについては稿を改めて論じてみたい。

今回着目した三つのテーマに加えて、木崎が書かなければいけないと感じていた問題は、もう一つあり、それは戦争という大きな主題であった。ここには当然ながら、彼女の満州での経験が反映されていよう。しかし、多くの作家がそうであるように、彼女もその体験を言葉で綴り、作品として昇華させるためには、相当の覚悟と時間が必要だったのではないだろうか。戦争については初期作品や短編小説でも言及されてはきたが、満州の記憶とともに本格的に長編として取り扱われるのは『蘇りの森』

(一九九九)においてである。富山、宗教、生命のテーマに加えて、戦争の問題をどのように作品に絡めて描き出しているのか、その深淵な作品世界を今後探求していきたい。

注

- 一 小林成子「作家の責任について」木崎さと子とロレンスの場合」*Alfalfa* 一〇、一九八七年三月、一一九、江種満子「木崎さと子」論―「青桐」を中心に(女性作家の新流)―(現代の女性作家)」「国文学解釈と鑑賞」(別冊)、一九九一年五月、一四七―一五五、須波敏子『「青桐」論(特集 現代作家と宗教(キリスト教編))』(カトリック作家の世界)』『国文学 解釈と鑑賞』七四巻四号、二〇〇九年四月、一〇三―一〇八、谷川拓也「現代女性作家による富山文学の変遷」木崎さと子から山内マリコへ」『群峰』四号、二〇一八年三月、二七―三七、小林福美「木崎さと子『青桐』論―(他者)へと開かれた生命観」『日本文学誌要(村山龍先生追悼特別号)』一〇三号、二〇二二年三月、六八―八三。また太田久夫は一九八六年にそれまでの木崎の著述、参考文献目録を作成している。芥川賞受賞に至るまでの木崎の作家活動を知る上で非常に参考になる資料である。太田久夫「木崎さと子著述目録・参考文献目録」『富山県図書館研究集録』第一七号、富山県図書館
- 二 木崎の経歴などに関しては、前掲の先行研究他、木崎さと子「自筆年譜」『とやま文学』二三号、一八〇―一八四、木崎さと子「死を凝視しつつ」『文學界』三九巻三号、一九八五年、三二―四三、「まつど文学散歩」⑩ 木崎さと子「青桐」『広報まつど』七二二号、一九九〇年一月二〇日、六、木崎さと子『夢の記憶―ある神父への手紙』(岩波書店、一九九七)を主に参照した。
- 三 須波、『「青桐」論』、一〇三。
- 四 同上。
- 五 木崎さと子「あとがき」『裸足』(文芸春秋、一九八二)、二五二。
- 六 同上。
- 七 木崎、「死を凝視しつつ」、三六―三八。
- 八 同上、三七―三九。
- 九 同上、三四。
- 一〇 同上、三三―三四。
- 一一 同上、四二。
- 一二 同上。
- 一三 木崎、『夢の記憶』、一〇。
- 一四 同上、九―一。

- 一五 木崎、「死を凝視しつつ」、三九―四〇。
- 一六 同上、四三。
- 一七 木崎さと子「裸足」『裸足』（文芸春秋、一九八二）、九七。
- 一八 江種、「木崎さと子論」、一五三。
- 一九 『ブリタニカ国際大百科事典』第二七卷（平凡社、一九八八）、一八七。
- 二〇 木崎、「死を凝視しつつ」、四〇。
- 二一 同上。
- 二二 ここでは木崎さと子「青桐」『青桐』（文芸春秋、一九八五）、五―一四―を参照した。テキストを引用する際には、本文中に頁数のみを記す。
- 二三 木崎、「死を凝視しつつ」、三六。
- 二四 同上、三六。
- 二五 高井有一、佐伯彰一「対談時評―木崎さと子「青桐」、桐山襲「風のクロニクル」」『文學界』三八卷一二号、一九八四年十二月、二〇八―二二三。
- 二六 木崎、「青桐」、一三、一四、二八。
- 二七 同上、一四。
- 二八 同上、五二。
- 二九 読売新聞医療情報部編著『完全図解 医療のしくみ』（講談社、二〇一一）、六六―六七。
- 三〇 木崎、「青桐」、八四―九八。
- 三一 同上、三〇。
- 三二 『日本大百科全書』一二卷（小学館、一九八六）、六六―六七、『日本大百科全書』二四卷（小学館、一九八八）二四卷、四四四。
- 三三 木崎、「死を凝視しつつ」、三四―三五。
- 三四 木崎、『夢の記憶』、一〇六―一一〇。